

飢餓の果て



登場人物

- ・ 神谷貴志 大日本帝国陸軍関東軍技術大佐、総司の親友であり、226の上官
- ・ 乙型第二班二十六番（通称226） 大日本帝国陸軍特殊部隊所属兵器
- ・ 織田総司 大日本帝国海軍航空隊少佐。神谷の親友で加奈子の夫、純矢の養父
- ・ 織田加奈子 総司の妻、純矢の養母
- ・ 織田純矢 大日本帝国海軍航空隊一等飛行兵曹、226の海軍における名称
- ・ 山崎亮 大日本帝国海軍航空隊大尉、純矢の上官

飢餓の果て

雪はいつまでも残っている、凍りついた大地――各家庭が暖を取るため吐き出す石炭の煤に染まり、黒ずんで溶けきらない雪は満州の冬の風物詩だ。ようやく暖かくなると、今度は何もかもが緩んで足を取られる。そんな土地はどこまでも続き果てがなかったが、彼にとりその風景は幼いころの彼の家の光景を思い起こさせた。感傷というわけではない、むしろその腸を抉りこの地にばら撒いてやりたくするような殺意を持ってそれを思い出させるのである。

彼の家は海のそばにあった。光の当たらぬ路地の一角にある崩れそうな長屋である。いつも饅えた匂いがしていたが、海風のために澱むことはない。

祖父の代までは、その海で漁をして生計を立てていたが、父は造船所で働いていた。しかし職場で怪我を負い、そのために職を失ってからは酒に逃げるようになり、母が家族を背負うこととなった。

湿った畳は所々腐っていた。冬でも腐臭は鼻をつく。湿気は一年中纏わりついて離れなかった。何もかもが腐る、しかし酒に酔った父に殴られて流れ出た血は腐敗せず、ただ彼の服を濡らして体温を奪うだけであった。

思えば母の涙も父の酒も腐らなかった。

背を丸めて潜り込む薄い布団は熱を抱えていられない。冬は眠れば死んでしまうかと思われたが、震えて歯を鳴らしていると、時折隣から母親が布団に入り込んできて、彼を抱きしめてくれた。

その風景と記憶とを、彼は殺したくてたまらなかった。

手を血に濡らし、火傷をしそうなほどに熱い臓物を引きずり出して撒き散らし、踏みつぶしてしまいたかった、ただ殺したい――憎しみなどない、悲しみもない、ただただ殺してしまいたかった。

酔いしれるほどの血液の匂いと硝煙弾雨、その中で、かの景色を彼に思い出させたものは愛刀であった。

夜襲を仕掛けてきた敵軍との小競り合いが終わり、朝が闇夜を光に溶かして訪れる頃である。既に満州から中華民国の正規軍は駆逐されていたが、抗日運動との衝突はなくなることはない。最前線での本部にしている農村の家の庭には、匪賊として殺した農民の遺体を放り出したままにしていた。死が充満する前線の薄暗い本部は腐敗の匂いが溜まり、小さな蠟燭の炎はそれらを焦がして燃え盛っている。

その男は父親の部下であった。名を織田総司という。大日本帝国海軍の軍人だった。見合い相手と聞かされて、その男の写真を見た加奈子には、写真の中の彼が軍服を着ているためにかろうじてそうと分かる程度で、彼の容貌は手垢のつかぬ混じりけのない素直さと、そしてその素直さからくる他人を慈しむ心が形を成しているのだった。見合いのための写真ですらそうである。顔をつきあわせてみれば、その純白な心は輝きを放って彼女を包み、将来の確かさと温かさを約束した。

そもそも相手がどのような人間であろうとも、加奈子には見合いに対して否やはない。ましてや父の部下であり、下からも上からも称賛され誰もが認める善良な男をどうして拒めるであろう。

こうして彼女は総司と婚約した。

「会わせたい友達がいるんだ」

二人で会うたびに、総司はいつも幼さを残す笑顔で言った。

「俺の親友なんだ。すごく強くて頭がよくてね」

その親友は総司にとって両親以上の存在らしく、しきりに加奈子を見せたがっているのである。大事そうに軍服の胸ポケットに入られている総司と親友の写真を、お守りみたいなものだと思われくさそうに総司が言うのもいつものことだ。その度に加奈子は、総司の顔をまじまじと見つめてから写真に視線を落とすのである。

総司という太陽のような温かさと何もかもを包み込む仏のような男の親友は、陸軍の軍服に身を包んでいた。白い詰襟を着た総司と並んで立つその姿は、写真という世界の中だけでも十分に禍々しい気配を放っている。

鋭利な刃物のような目がこちらを見据えていた。口元には微笑が浮かんでいるものの、その瞳は少しも笑むことはない。それは、逃げる者の背を躊躇いもなく斬り下ろすことのできる冷たい視線であり、写真の向こう側からこれを見る者を切り刻もうとする研ぎ澄まされた青く光る刃が煌めき、恐怖を植え付けた。

「……ご親友なんですか」

加奈子が信じがたいといった風に呟くと、総司は嬉しそうに目を輝かせ、

「ああ！ 幼馴染でね、学校でいじめられてばかりだった俺をよく助けてくれたんだよ。いつも冷静で大きく構えていて頼りになるんだ。俺、あいつが慌てたところや驚いたところを一度も見ることがないよ。あいつから見たら、俺なんかとても頼りないだろうし、ちっとも助けにならないんだけどさ。今でもたまに一緒に飲んでいるんだ。名前は」

その男の名は、神谷貴志といった。

神殺し

不意に飛び出した少年の手には錆びた貧弱なナイフが握られていた。刺されると思った瞬間でも、神谷の脳裏にはどこか違う場所でこの状況を捉えていた。少年から己に向けられた幼い憎悪と殺意はどこか他人事であった。

この少年は、もういつ制圧したのかも覚えていないが、どこかの村の農家にあった仏像の裏に隠れていたのだった。薄暗い家の中には無残な刺殺体が2、3転がり、むっとした生臭い血と焦げた肉と髪の毛の匂いが鼻につく、そんな光景の中に少年は息をひそめていた。

あの死骸らを生み出したのはもちろん乙型第二班二十六番一一二二六だ。軍服を着ない敵はあちらこちらにいた。それは敵であるかもしれないし、単なる農夫であるかもしれない。しかし軍服であろうが農作業着であろうが一一その手に銃を持とうが鍬を持とうが、日本軍の行動が彼らによって敵側に漏れているのは確かであった。これだから大陸の侵攻は嫌なのだ、補給も不十分、間延びした友軍、そもそも戦火拡大の意図は一一などと神谷は心中密かに上層部へ恨みを含んだ無数の意見を並べ立てて見るものの、彼も組織の一軍人である。敵を蹴散らせと言われれば、戦場を駆ける犬でしかない。

怪しい動きをする男がいる一一兵らから報告を受け、二二六がそれを追っていた。それがとある農家の一つに駆け込むのを二二六は補足していたのであった。その後を追って二二六が家に乱暴に侵入すると、家人が出てきた。皺だらけの顔の中に憎悪を燃やす目を持つ農夫で、日本軍と対峙してもなお怖気づく様子はない。二二六は抜き放ったままの日本刀を暗闇の中で煌めかせ、拳銃を相手に向けていた。彼が全身から放つ敵への殺気も尋常ではない。すでに照準は敵を捕らえており、銃弾が放たれるのを待っていた。瞬きもしない、刃のような青みがかった灰色の目は友軍ですら敬遠しているのである。しかし農夫は落ち着いていた。誰もいない、お前たちの見間違いであるとたどたどしい日本語で繰り返すだけである。

二二六が軍靴で砂を踏む音が屋内に響いた。

「見間違いかどうか、確かめる」

彼は素早く刀を男に突き刺した。左右の手を自在に使える彼は鮮やかに男を刺し殺すと、破壊の音を響かせて家の中を荒らし捜索した。居合わせていた男の家族らしき女子供も逃げる隙も与えず黙々と殺し、帰宅してきた老夫婦も刺殺した。そしてやっと、古びて破れかけた敷物の下に地下室の入り口を見つけたのだった。その戸口を開けた二二六は、何食わぬ顔で手榴弾を投げ込み、それでも足らずに火をつけた敷物を投げ入れる。手榴弾で死にきれなかった者たちの呻き声と、煙で燻りだされた者たちの怒号は、まさに地獄の底から湧き上る断末魔であった。

神谷も暴れまわる二二六を戸口から煙草を銜えて眺めていた。数本ほど吸ううちに、家の中には命の気配が消えた。二二六は抵抗する男たちを斬りおろし、時には撃ち殺した。命乞いをして小さな子供を抱く女をその赤ん坊ごと刃で貫いた。言葉は分からずとも、何を言っているのか容易に想像がつくであろうに、彼の中では喚いているとしか捉えない。その涙も嘆きも命を奪う行為の中の装飾の一つに過ぎない。それが何を意味するのか理解する心を彼は与えられていないのだった。

それは、大日本帝国陸軍が生み出した、人の形をした歩兵用の火器であり刀であった。

乙型第二班二十六番の存在が認められたのは昭和十二年頃までで、南京で目撃されたのが最後となっている。

兵器にするべく拾われて、兵器として育てられた子供は、彼が所属していた特殊部隊の解体後しばらくは戦場で使用されていたが、それを上層部から見咎められ処分の決定が出されたのだった。そして陸軍から海軍の航空隊へという前例のない配置換えとなって、大陸から姿を消したのである。

次に彼に与えられた武器は日本刀でも銃でもない。

世界最強と謳われた海軍の戦闘機、零式艦上戦闘機である。

零式艦上戦闘機に乗る彼は、戦闘機の搭乗員としての名——織田純矢という名を与えられたが、彼の製造番号はいまだに彼の胸部に刻まれている。

純矢が海軍に来た頃、まだ彼には居心地のよかった零戦の操縦席も、今では少し窮屈になっている。

冬の長い大陸から肌を焼く南の空に至るまで、彼はその若さにしては様々な世界を見た。しかしどこにいてもやることは戦争だけであった。陸軍にいたころは、彼ら歩兵の戦闘援護に空を飛んでいた飛行機を、銃弾飛び交う地を這いながら見上げたものだが、今ではそれを操り戦場の空を駆けているのだった。海軍の上官は神谷と違って温和な大尉の山崎という士官で、彼は部隊内外で母と呼ばれるほど世話好きな男だった。兵器として扱われてきた彼に戦友というものができたのも、この海軍航空隊に来てからである。登録番号以外で呼ばれることも初めてであったし、養子として迎えられた総司の家では、今まで殺してきた敵らと大して変わらない年齢の者たちから兄と呼ばれ、弟と呼ばれた。加奈子は山崎と似たような柔和な笑顔を浮かべ、純矢の好物である甘味を基地に差し入れてくれたものだった。

純矢は、どうして自分がこのような状況に置かれているのか時折不思議に思ったものだったが、神谷から特殊部隊の任を解かれ、それでもなお付け加えられた命令——陸海空に溢れる敵を殺せと言われていたために、忠実に任務をこなしていくだけである。

死神の爪

死臭の漂う家屋は春だというのにしんと冷え、どこからか入り込んだ桜の花びらも凍りつきそうなほどである。生きる者のための建物の中に命の気配はない。

神谷は両親の位牌を無造作に女の遺体の上に放り投げ、最後の一杯を楽しんでいた。

灰皿では、積み上げた煙草の吸殻がもうもうと煙をあげており、布団に落ちた灰がくすぶり始めている。

部屋は血の腐る匂いと煙とが入り混じって咽かえるほどだが、神谷にとっては懐かしい匂いと光景であり、その空間を彩る酸化した血は彼の心を躍らせている。

血で染まった布団に倒れこむ女は、腹を一突きにされて絶命した。畳にまで溢れるほど流れ出した血で染まった布団は赤黒く鈍く光っている。己が死に気がつかないまま彼女は死んだであろう。夫の愛人をこのようにするつもりであった彼女が、実は夫が自分をも片付けに来たことを知ったら、どのような絶望を夫に見せたであろうか。神谷がこの部屋に来た頃にはもう既に彼女は絶命していたために、彼女の失意を見ることはできなかった。そのことに神谷は淡い後悔を感じていたが、それをかき消すには十分というほどに、もう一つある女の遺体、その命を奪った首の傷は素晴らしく美しいものであったし、その最期は想像していたものよりも感動的であった。